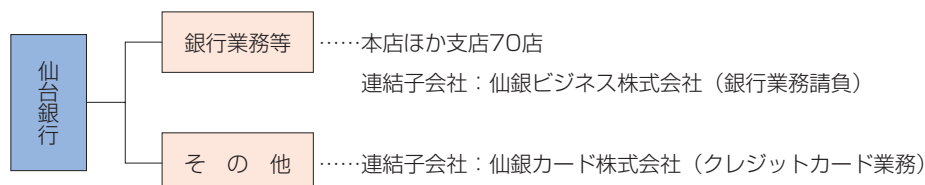


■企業集団の事業の内容

当行グループ（当行及び当行の関係会社）は、当行及び連結子会社2社で構成され、銀行業務を中心にクレジットカード業務などの金融サービスに係る事業を行っております。

〈企業集団の事業系統図〉



■連結子会社の状況

名 称	仙銀ビジネス株式会社	仙銀カード株式会社
所在地	仙台市青葉区一番町2丁目1番1号	仙台市青葉区一番町2丁目1番1号
事業内容	当行委託の事務代行業務、ATM監視・管理業務、集金業務、現金精査整理業務、店舗・社宅・寮等不動産の保守・管理・賃貸業務等	クレジットカード業務
設立年月日	平成2年7月27日	平成12年4月19日
資本金	10百万円	50百万円
当行出資比率	100%	88%
子会社の出資比率	-	-

■最近5連結会計年度に係る主要な経営指標等の推移

(単位:百万円)

決算期	平成12年3月期	平成13年3月期	平成14年3月期	平成15年3月期	平成16年3月期
連結経常収益	21,591	20,277	20,969	19,015	17,813
連結経常利益 (△は連結経常損失)	121	△6,082	886	1,134	717
連結当期純利益 (△は連結当期純損失)	131	△3,597	490	509	682
連結純資産額	22,826	18,175	17,016	17,685	19,913
連結総資産額	757,748	756,034	750,680	749,615	756,570
1株当たり純資産額	3,007.02円	2,394.36円	2,242.23円	2,331.35円	2,626.10円
1株当たり当期純利益 (△は1株当たり当期純損失)	29.18円	△473.87円	64.63円	67.15円	90.04円
連結自己資本比率 (国内基準)	8.52%	7.69%	7.30%	7.22%	7.54%
連結自己資本利益率	0.84%	△17.54%	2.78%	2.93%	3.63%

- (注) 1. 当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。
 2. 平成14年3月期以前の1株当たり当期純利益（又は当期純損失）は、期中平均株式数（自己株式を除く）により算出しております。
 3. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が無いので記載しておりません。
 4. 平成15年3月期から、「1株当たり純資産額」、「1株当たり当期純利益（又は当期純損失）」及び「潜在株式調整後1株当たり当期純利益」（以下「1株当たり情報」という。）の算定に当たっては、「1株当たり当期純利益に関する会計基準」（企業会計基準第2号）及び「1株当たり当期純利益に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第4号）を適用しております。
 また、これら1株当たり情報の算定上の基礎は、40ページの「1株当たり情報」に記載しております。
 5. 連結自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づく大蔵省告示に定められた算式に基づき作成しております。なお、当行は国内基準を採用しております。
 6. 当行は国内基準を適用しておりますが、金融システム改革のための関係法律の整備等に関する法律の施行により銀行法第14条の2が改正されたことに伴い、平成11年3月期より連結自己資本比率を算出しております。

連結情報

■営業の概況

(預 金) 預金残高につきましては、景況を反映し法人預金が減少したものの、個人預金が堅調に推移し前期比45億円増加の7,207億円となりました。

(貸 出 金) 貸出金につきましては、中小企業向け貸出及び個人向け貸出の増強に努めてまいりました。その結果、中小企業向け貸出は資金需要の回復に乏しく減少したものの、個人向け貸出は住宅ローンを中心に増加しました。また、地方公共団体向けの貸出が堅調に推移したこともあり、貸出金残高は、前期比250億円増加の4,966億円となりました。

(有 価 証 券) 有価証券残高につきましては、国債等が増加したことにより、前期比10億円増加の1,755億円となりました。

(損益関係) 損益関係につきましては、資金の効率的な運用に努めましたが資金運用収益の低下等により経常収益は前期比1,202百万円減少し17,813百万円となり、一方、経常費用は徹底した諸経費の削減に努め前期比786百万円減少し17,095百万円となりました。この結果、経常利益は前期比417百万円減少し717百万円、当期純利益は前期比173百万円増加し682百万円となりました。

(自己資本比率) 前期比0.32ポイント上昇し7.54%となりました。

連結財務諸表

■連結貸借対照表

[資 産 の 部]

(単位:百万円、%)

科 目	前連結会計年度末 (平成15年3月31日)		当連結会計年度末 (平成16年3月31日)	
	金額	構成比	金額	構成比
現金預け金	26,585	3.55	24,432	3.23
コールローン及び買入手形	54,562	7.28	37,836	5.00
買入金銭債権	37	0.01	37	0.00
金銭の信託	3,258	0.43	2,981	0.39
有価証券 ^{*6}	174,511	23.28	175,594	23.21
貸出金 ^{*1,2,3,4,5,7}	471,609	62.91	496,615	65.65
外国為替 ^{*5}	27	0.00	31	0.00
その他資産	3,691	0.49	3,991	0.53
動産不動産 ^{*6,9}	12,580	1.68	12,800	1.69
繰延税金資産	7,497	1.00	5,990	0.79
支払承諾見返	4,526	0.60	4,824	0.64
貸倒引当金	△9,272	△1.23	△8,566	△1.13
資産の部合計	749,615	100.00	756,570	100.00

[負債、少数株主持分及び資本の部]

(単位:百万円、%)

科 目	前連結会計年度末 (平成15年3月31日)		当連結会計年度末 (平成16年3月31日)	
	金額	構成比	金額	構成比
預 金	716,245	95.55	720,761	95.27
借 用 金 ^{*10}	6,674	0.89	6,648	0.88
外国為替	0	0.00	0	0.00
その他負債	1,759	0.24	1,589	0.21
賞与引当金	218	0.03	259	0.03
退職給付引当金	745	0.10	813	0.11
再評価に係る繰延税金負債 ^{*8}	1,753	0.23	1,753	0.23
支払承諾	4,526	0.60	4,824	0.64
負債の部合計	731,923	97.64	736,649	97.37
少数株主持分	6	0.00	7	0.00
資 本 金 ^{*11}	7,485	1.00	7,485	0.99
資本剰余金	5,875	0.78	5,875	0.78
利益剰余金	3,250	0.43	3,553	0.47
土地再評価差額金 ^{*8}	2,545	0.34	2,545	0.33
その他有価証券評価差額金	△1,456	△0.19	476	0.06
自己株式 ^{*11}	△13	△0.00	△22	△0.00
資本の部合計	17,685	2.36	19,913	2.63
負債、少数株主持分 及び資本の部合計	749,615	100.00	756,570	100.00

■連結損益計算書

(単位:百万円、%)

科 目	前連結会計年度 (平成14年4月1日から 平成15年3月31日まで)		当連結会計年度 (平成15年4月1日から 平成16年3月31日まで)	
	金額	百分比	金額	百分比
経常収益	19,015	100.00	17,813	100.00
資金運用収益	14,660		14,305	
貸出金利息	12,261		11,964	
有価証券利息配当金	2,226		2,215	
コールローン利息及び買入手形利息	30		43	
預け金利息	99		47	
その他の受入利息	42		34	
役員取引等収益	2,540		2,517	
その他業務収益	1,143		70	
その他経常収益	669		919	
経常費用	17,881	94.04	17,095	95.97
資金調達費用	651		543	
預金利息	340		245	
譲渡性預金利息	2		4	
コールマネー利息及び売渡手形利息	-		0	
借用金利息	153		135	
その他の支払利息	155		158	
役員取引等費用	1,252		1,402	
その他業務費用	120		148	
営業経費	12,086		12,166	
その他経常費用	3,770		2,835	
貸倒引当金繰入額	1,149		1,479	
その他の経常費用 ^{*1}	2,620		1,355	
経常利益	1,134	5.96	717	4.03
特別利益	433	2.28	745	4.18
動産不動産処分益 ^{*2}	78		240	
償却債権取立益	355		133	
その他の特別利益 ^{*3}	0		371	
特別損失	106	0.56	194	1.09
動産不動産処分損 ^{*4}	106		194	
税金等調整前当期純利益	1,461	7.68	1,268	7.12
法人税、住民税及び事業税	45	0.24	49	0.28
法人税等調整額	904	4.75	535	3.01
少数株主利益	1	0.01	0	0.00
当期純利益	509	2.68	682	3.83

連結情報

■連結剰余金計算書

(単位:百万円)

科 目	年 度 別	前 連 結 会 計 年 度		当 連 結 会 計 年 度	
		(平成14年4月1日から平成15年3月31日まで)		(平成15年4月1日から平成16年3月31日まで)	
(資本剰余金の部)					
資本剰余金	期首残高	5,875		5,875	
資本剰余金	増加	-		-	
資本剰余金	減少	-		-	
資本剰余金	期末残高	5,875		5,875	
(利益剰余金の部)					
利益剰余金	期首残高	3,119		3,250	
利益剰余金	増加	509		682	
利益剰余金	純増	509		682	
利益剰余金	減少	379		379	
利益剰余金	当期純増	379		379	
利益剰余金	期末残高	3,250		3,553	

■連結キャッシュ・フロー計算書

(単位:百万円)

科 目	年 度 別	前連結会計年度		当連結会計年度	
		(平成14年4月1日から平成15年3月31日まで)		(平成15年4月1日から平成16年3月31日まで)	
I 営業活動によるキャッシュ・フロー					
税金等調整前当期純利益		1,461		1,268	
減価償却費		390		496	
貸倒引当金の増減(△)額		△920		△706	
賞与引当金の増減(△)額		△90		41	
退職給付引当金の増加額		68		67	
資金運用収益		△14,660		△14,305	
資金調達費用		651		543	
有価証券関係損益(△)		1,570		1,208	
金銭の信託の運用損益(△)		△23		△11	
為替差損益(△)		△111		△57	
動産不動産処分損益(△)		28		△45	
貸出金の純増(△)減		△3,372		△25,005	
預金の純増減(△)		4,262		4,515	
借入金(劣後特約借入金を除く)の純増減(△)		△25		△25	
預け金(日銀預け金を除く)の純増(△)減		1,343		△1,142	
コールローン等の純増(△)減		△4,504		16,725	
外国為替(資産)の純増(△)減		13		△3	
外国為替(負債)の純増減(△)		0		△0	
資金運用による収入		12,668		12,090	
資金調達による支出		△773		△625	
その他		△1,195		△350	
小 計		△3,218		△5,322	
法人税等の支払額		△843		△31	
営業活動によるキャッシュ・フロー		△4,061		△5,354	
II 投資活動によるキャッシュ・フロー					
有価証券の取得による支出		△105,323		△71,867	
有価証券の売却による収入		54,615		2,499	
有価証券の償還による収入		54,666		69,990	
金銭の信託の増加による支出		△2,486		-	
金銭の信託の減少による収入		-		286	
投資活動としての資金運用による収入		2,152		2,181	
動産不動産の取得による支出		△736		△867	
動産不動産の売却による収入		213		222	
投資活動によるキャッシュ・フロー		3,101		2,445	
III 財務活動によるキャッシュ・フロー					
配当金支払額		△379		△378	
自己株式の取得による支出		△8		△8	
財務活動によるキャッシュ・フロー		△387		△387	
IV 現金及び現金同等物に係る換算差額		0		0	
V 現金及び現金同等物の増加額		△1,347		△3,295	
VI 現金及び現金同等物の期首残高		22,513		21,166	
VII 現金及び現金同等物の期末残高		21,166		17,870	

■連結財務諸表

前連結会計年度及び当連結会計年度の連結財務諸表は、証券取引法第193条の2の規定に基づき、新日本監査法人の監査証明を受けております。

銀行法第20条第2項の規定により作成した書類については、商法特例法による会計監査人の監査を受けております。

■連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項（当連結会計年度）

1. 連結の範囲に関する事項

- (1) 連結子会社 2社 仙銀ビジネス株式会社 仙銀カード株式会社
(2) 非連結子会社 0社

2. 持分法の適用に関する事項

該当ありません。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

- (1) 連結子会社の決算日は次のとおりであります。 3月末日 2社
(2) 子会社については、決算日の財務諸表により連結しております。

4. 会計処理基準に関する事項

- (1) 商品有価証券の評価基準及び評価方法
商品有価証券の評価は、時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）により行っております。

- (2) 有価証券の評価基準及び評価方法

- (1) 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法（定額法）、その他有価証券のうち時価のあるものについては、連結決算日の市場価格等に基づく時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）、時価のないものについては、移動平均法による原価法又は償却原価法により行っております。なお、その他有価証券の評価差額については、全部資本直入法により処理しております。

- (2) 金銭の信託において信託財産を構成している有価証券の評価は、上記(1)及び(2)(イ)と同じ方法により行っております。

- (3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

- デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。

- (4) 減価償却の方法

① 動産不動産

当行及び連結子会社の動産不動産の減価償却は、定額法を採用しております。なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物 2年～50年 動産 2年～15年

② ソフトウェア

自社利用のソフトウェアについては、当行及び連結子会社で定める利用可能期間（5年）に基づく定額法により償却しております。

- (5) 貸倒引当金の計上基準

当行の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者（以下「破綻先」という。）に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者（以下「実質破綻先」という。）に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認められる額を計上しております。上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は10,213百万円であります。

連結子会社の貸倒引当金は、一般債権については過去の貸倒実績率等を勘案して必要と認められた額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額をそれぞれ引き当てております。

- (6) 賞与引当金の計上基準

賞与引当金は、従業員への賞与の支払に備えるため、従業員に対する賞与の支給見込額のうち、当連結会計年度に帰属する額を計上しております。

- (7) 退職給付引当金の計上基準

退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当連結会計年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。また、数理計算上の差異の費用処理方法は以下のとおりであります。

数理計算上の差異：各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（15年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生の日翌連結会計年度から費用処理

なお、会計基準変更時差異（2,385百万円）については、15年による按分額を費用処理しております。

- (8) 外貨建資産・負債の換算基準

当行の外貨建資産・負債については、連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。

（会計方針の変更）

外貨建取引等の会計処理につきましては、前連結会計年度は「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号。以下「業種別監査委員会報告第25号」という。）による経過措置を適用しておりましたが、当連結会計年度からは、同報告の本則規定に基づき資金調達通貨（邦貨）を資金運用通貨（外貨）に変換する等の目的で行う為替スワップ取引については、ヘッジ会計を適用しております。

なお、当該ヘッジ会計の概要につきましては、「(10) 重要なヘッジ会計の方法」に記載しております。この結果、従来、期間損益計算していた当該為替スワップ取引の時価評価し、正味の債権及び債務を連結貸借対照表に計上したため、従来の方針による場合と比較して、「その他資産」は11百万円増加、「その他負債」は11百万円増加しております。

なお、この変更に伴う損益への影響はありません。

また、上記以外の先物外国為替取引に係る円換算差金は、従来、相殺のうえ「その他資産」中のその他の資産又は「その他負債」中のその他の負債で純額表示しておりましたが、当連結会計年度からは、業種別監査委員会報告第25号に基づき総額で表示するとともに、「その他資産」及び「その他負債」中の金融派生商品に含めて計上しております。

この変更による影響はありません。

連結子会社の外貨建資産・負債はございません。

- (9) リース取引の処理方法

当行及び連結子会社のリース物件の所有権が借主に移転すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引については、通常の賃貸借取引に準じた会計処理によっております。

- (10) 重要なヘッジ会計の方法

当行の外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、繰延ヘッジによっております。

前連結会計年度は業種別監査委員会報告第25号による経過措置を適用しておりましたが、当連結会計年度からは、同報告の本則規定に基づき資金調達通貨（邦貨）を資金運用通貨（外貨）に変換する等の目的で行う為替スワップ取引については、ヘッジ会計を適用しております。

これは、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う為替スワップ取引をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価するものであります。

なお、その他一部の資産・負債については、金融商品に係る会計基準（「金融商品に係る会計基準の設定に関する意見書」（企業会計審議会平成11年1月22日）注14により、金利スワップ取引に係る金銭の受払の純額等を当該資産等に係る利息に加減して処理しております。

連結子会社はヘッジ会計をしておりません。

- (11) 消費税等の会計処理

当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

5. 連結子会社の資産及び負債の評価に関する事項

連結子会社の資産及び負債の評価については、全面時価評価法を採用しております。

6. 利益処分項目の取扱い等に関する事項

連結剰余金計算書は、連結会計期間において確定した利益処分に基づいて作成しております。

7. 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、連結貸借対照表上の「現金預け金」のうち現金及び日本銀行への預け金であります。

連結情報

■注記事項（当連結会計年度）

（連結貸借対照表関係）

※1. 貸出金のうち、破綻先債権額は 4,239百万円、延滞債権額は27,812百万円です。

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払が遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金（貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。）のうち、法人税法施行令（昭和40年政令第97号）第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

※2. 貸出金のうち、3カ月以上延滞債権額は358百万円です。
なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が約定支払日の翌日から3カ月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

※3. 貸出金のうち、貸出条件緩和債権額は3,886百万円です。
なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。

※4. 破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は36,297百万円です。

なお、上記1.から4.に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

※5. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号）に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形及び買入外国為替は、売却又は（再）担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は、5,045百万円です。

※6. 担保に供している資産は次のとおりです。
日本銀行共通担保、為替決済、業界共通システム、公金事務等の取引の担保として、有価証券50,942百万円を差し入れております。

なお、不動産のうちの保証金権利金は228百万円です。

※7. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は、125,627百万円です。このうち原契約期間が1年以内のもの（又は任意の時期に無条件で取消可能なもの）が117,743百万円あります。

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行及び連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行及び連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴するほか、契約後も定期的に予め定めている行内（社内）手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

※8. 土地の再評価に関する法律（平成10年3月31日公布法律第34号）に基づき、当行の事業用土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として資本の部に計上しております。再評価を行った年月日 平成10年3月31日

同法律第3条第3項に定める再評価の方法

土地の再評価に関する法律施行令（平成10年3月31日公布政令第119号）

第2条第4号に定める地価税法（平成3年法律第69号）第16条に規定する地価税の課税価格の計算の基礎となる土地の価額を算定するために国税庁長官が定めて公表した方法により算定した価額に基づいて、実行価格補正等、合理的な調整を行って算出しております。

同法律第10条に定める再評価を行った事業用土地の当連結会計年度末における時価の合計額と当該事業用土地の再評価後の帳簿価額の合計額との差額 2,192百万円

※9. 動産不動産の減価償却累計額4,543百万円
※10. 借入金には、他の債務より債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金 6,600百万円が含まれております。

※11. 連結会社が保有する連結財務諸表提出会社の株式の数は、以下のとおりです。

普通株式 8千株

なお、当行の発行済株式総数は、普通株式7,591千株です。

（連結損益計算書関係）

※1. その他の経常費用には、貸出金償却655百万円及び株式等売却損600百万円を含んでおります。

※2. 内訳は次のとおりです。
土地売却益 230百万円
建物売却益 10百万円

※3. 主な内訳は次のとおりです。
劣後特約付借入金の期限前償還に対する償還差額370百万円

※4. 内訳は次のとおりです。

土地売却損 92百万円
土地評価損 55百万円
除却損 45百万円

（連結キャッシュ・フロー計算書関係）

現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

平成16年3月31日現在

現金預け金勘定 24,432百万円
定期預け金 △2,520百万円
その他の預け金 △4,042百万円
現金及び現金同等物 17,870百万円

（関係当事者との取引）

関係当事者との取引について記載すべき重要なものはありません。

（リース取引関係）

1. リース物件の所有権が借主に移転すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引

リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額及び年度末残高相当額

	動産	その他	合計
取得価額相当額	2,721百万円	429百万円	3,150百万円
減価償却累計額相当額	2,193百万円	235百万円	2,429百万円
年度末残高相当額	527百万円	193百万円	721百万円

・未経過リース料年度末残高相当額

	1年内	1年超	合計
	439百万円	333百万円	722百万円

・支払リース料、減価償却費相当額及び支払利息相当額

支払リース料 561百万円
減価償却費相当額 498百万円
支払利息相当額 36百万円

・減価償却費相当額の算定方法

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。

・利息相当額の算定方法

リース料総額とリース物件の取得価額相当額との差額を利息相当額とし、各連結会計年度への配分方法については、利息法によっております。

2. オペレーティング・リース取引

	1年内	1年超	合計
・未経過リース料	11百万円	2百万円	14百万円

（退職給付関係）

1. 採用している退職給付制度の概要

当行は、確定給付型の制度として、適格退職年金制度を設けております。また、従業員の退職等に際して割増退職金を支払う場合があります。一部の連結子会社は、中小企業退職金共済制度及び退職一時金制度を設けております。

2. 退職給付債務に関する事項

（単位：百万円）

区 分	当連結会計年度 （平成16年3月31日）
退職給付債務(A)	△6,018
年金資産(B)	3,047
未積立退職給付債務(C)=(A)+(B)	△2,971
会計基準変更時差異の未処理額(D)	1,749
未認識数理計算上の差異(E)	408
連結貸借対照表計上額純額(G)=(C)+(D)+(E)	△813
退職給付引当金(G)	△813

(注) 1. 臨時に支払う割増退職金は含めておりません。

2. 連結子会社は、退職給付債務の算定にあたり、簡便法を採用しております。

3. 退職給付費用に関する事項

（単位：百万円）

区 分	当連結会計年度 （平成16年3月31日）
勤務費用	296
利息費用	121
期待運用収益	-
数理計算上の差異の費用処理額	82
会計基準変更時差異の費用処理額	159
その他（臨時に支払った割増退職金等）	38
退職給付費用	696

(注) 簡便法を採用している連結子会社の退職給付費用は、一括して「勤務費用」に含めて計上しております。

連結情報

4. 退職給付債務等の計算の基礎に関する事項

区 分	当連結会計年度 (平成16年3月31日)
(1) 割引率	2.0%
(2) 期待運用収益率	0.0%
(3) 退職給付見込額の期間配分方法	期間定額基準
(4) 数理計算上の差異の処理年数	15年 各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数による定額法により按分した額を、それぞれ発生の日連結会計年度から費用処理することとしている。
(5) 会計基準変更時差異の処理年数	15年

(生産、受注及び販売の状況)

銀行業における業務の特殊性のため、該当する情報がないので記載しておりません。

(税効果会計関係)

- 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主原因別の内訳

繰延税金資産	
貸倒引当金	3,930百万円
退職給付引当金	328百万円
減価償却超過額	141百万円
動産不動産の未実現利益の消去	866百万円
有価証券償却否認額	362百万円
税務上の繰越欠損金	823百万円
その他	217百万円
繰延税金資産小計	6,667百万円
評価性引当額	△336百万円
繰延税金資産合計	6,331百万円
繰延税金負債	
その他有価証券評価差額金	△322百万円
債権債務相殺消去に伴う貸倒引当金の取崩	△18百万円
繰延税金負債合計	△340百万円
繰延税金資産の純額	5,990百万円
- 連結財務諸表提出会社の法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

法定実効税率	41.68%
(調整)	
交際費等永久に損金に算入されない項目	2.10%
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△2.67%
住民税均等割額	2.32%
評価性引当額	△0.49%
税率変更による期末繰延税金資産の減額修正	3.25%
その他	△0.09%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	46.10%

(1株当たり情報)

	当連結会計年度 (自平成15年4月1日 至平成16年3月31日)
1株当たり純資産額	2,626.10円
1株当たり当期純利益	90.04円

(注) 1. 前連結会計年度から「1株当たり当期純利益に関する会計基準」(企業会計基準第2号)及び「1株当たり当期純利益に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第4号)を適用しております。

なお、当該会計基準及び適用指針の適用前に採用していた方法により算定した、前連結会計年度の1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益は同額であります。

2. 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、次のとおりであります。

	当連結会計年度 (自平成15年4月1日 至平成16年3月31日)
1株当たり当期純利益	682百万円
当期純利益	-
普通株主に帰属しない金額	-
普通株式に係る当期純利益	682百万円
普通株式の期中平均株式数	7,584千株

3. なお、潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式がないので記載しておりません。

連結情報

■有価証券関係

※1. 連結貸借対照表の有価証券について記載しております。

※2. 「子会社株式及び関連会社株式で時価のあるもの」については、諸財務表における注記事項として記載しております。

なお、「子会社株式及び関連会社株式で時価のあるもの」については該当ありません。

1. 売買目的有価証券

(単位:百万円)

種類	期別	前連結会計年度末(平成15年3月31日現在)		当連結会計年度末(平成16年3月31日現在)	
		連結貸借対照表計上額	前連結会計年度の損益に含まれた評価差額	連結貸借対照表計上額	当連結会計年度の損益に含まれた評価差額
売買目的有価証券		-	-	-	-

2. 満期保有目的の債券で時価のあるもの

(単位:百万円)

種類	期別	前連結会計年度末(平成15年3月31日現在)					当連結会計年度末(平成16年3月31日現在)				
		連結貸借対照表計上額	時価	差額	うち益	うち損	連結貸借対照表計上額	時価	差額	うち益	うち損
国債		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
地方債		3,144	3,380	236	236	-	3,144	3,291	147	147	-
短期社債		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
社債		2,000	2,000	0	0	-	-	-	-	-	-
その他		792	775	△16	8	25	793	800	6	6	-
合計		5,936	6,157	220	245	25	3,937	4,091	153	153	-

(注) 1. 時価は、前連結会計年度末日、当連結会計年度末日における市場価格等に基づいております。

2. 「うち益」「うち損」はそれぞれの「差額」の内訳であります。

3. その他有価証券で時価のあるもの

(単位:百万円)

種類	期別	前連結会計年度末(平成15年3月31日現在)					当連結会計年度末(平成16年3月31日現在)				
		取得原価	連結貸借対照表計上額	評価差額	うち益	うち損	取得原価	連結貸借対照表計上額	評価差額	うち益	うち損
株式		11,734	9,286	△2,447	830	3,277	10,601	11,418	816	1,574	758
債券		126,325	127,110	784	1,109	324	108,540	108,744	203	692	488
国債		44,182	44,219	37	356	319	51,145	51,072	△73	322	395
地方債		2,673	2,812	138	138	-	2,674	2,702	28	59	30
短期社債		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
社債		79,470	80,079	608	613	5	54,720	54,969	248	310	62
その他		8,148	7,723	△425	7	433	14,755	14,555	△199	302	502
出資		473	472	△0	-	0	956	952	△3	-	3
合計		146,682	144,593	△2,088	1,947	4,035	134,853	135,671	817	2,570	1,752

(注) 1. 連結貸借対照表計上額は、前連結会計年度末日、当連結会計年度末日における市場価格等に基づく時価により計上したものであります。

2. 「うち益」「うち損」はそれぞれ「評価差額」の内訳であります。

3. その他有価証券の時価のあるもののうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復の見込みがないものと判断したもののについては、当該時価をもって連結貸借対照表価額とするとともに、評価差額を前連結会計年度、当連結会計年度の損失として処理(以下「減損処理」)しております。

4. 前連結会計年度における減損処理額は897百万円(うち、株式843百万円、投資信託54百万円)、当連結会計年度における減損処理額は、106百万円(投資信託106百万円)であります。

5. 時価が「著しく下落した」と判断するための基準は、前・当連結会計期間末日における時価が取得時価と比べて50%以上下落している場合は、全銘柄を著しい下落と判定し、30%以上50%未満下落している場合は、価格の回復可能性および発行会社の信用リスク等を勘案し判定しております。

6. 前連結会計年度、当連結会計年度において、その他有価証券の中に、「その他の資産」中の出資金を含めております。

4. 前・当連結会計年度中に売却した満期保有目的の債券

該当ありません。

5. 前・当連結会計年度中に売却したその他有価証券

(単位:百万円)

種類	期別	前連結会計年度 (自平成14年4月1日 至 平成15年3月31日)			当連結会計年度 (自平成15年4月1日 至 平成16年3月31日)		
		売却額	売却益の合計額	売却損の合計額	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額
その他有価証券		47,919	1,447	1,124	2,499	722	600

6. 時価のない有価証券の主な内容及び連結貸借対照表計上額

(単位:百万円)

種類	期別	前連結会計年度末 (平成15年3月31日現在)	当連結会計年度末 (平成16年3月31日現在)
満期保有目的の債券 非上場外国証券 社債		23,793 229	36,028 450
その他有価証券 非上場株式(店頭売買株式を除く)		430	459

7. 保有目的を変更した有価証券[前・当連結会計年度] 該当ありません。

連結情報

8. その他有価証券のうち満期があるもの及び満期保有目的の債券の償還予定額

(単位:百万円)

種 類	期 別	前連結会計年度末(平成15年3月31日現在)				当連結会計年度末(平成16年3月31日現在)			
		1年以内	1年超5年以内	5年超10年以内	10年超	1年以内	1年超5年以内	5年超10年以内	10年超
債 券		54,836	46,689	19,183	37,368	26,119	53,078	21,628	50,367
国 債		536	21,142	4,459	18,080	5,570	18,463	3,805	23,232
地 方 債		2	306	5,647	-	-	935	4,911	-
短 期 社 債		-	-	-	-	-	-	-	-
社 債		54,298	24,031	3,979	-	20,349	31,646	3,423	-
そ の 他		-	1,208	5,097	19,288	200	2,032	9,487	27,134
そ の 他		-	2,989	318	-	1,001	5,872	779	-
出 資 金		-	-	-	-	-	952	-	-
合 計		54,836	49,679	19,502	37,368	27,121	59,903	22,407	50,367

■金銭の信託関係

1. 運用目的の金銭の信託

(単位:百万円)

種 類	期 別	前連結会計年度末(平成15年3月31日現在)		当連結会計年度末(平成16年3月31日現在)	
		連結貸借対照表計上額	前連結会計年度の損益に含まれた評価差額	連結貸借対照表計上額	当連結会計年度の損益に含まれた評価差額
運用目的の金銭の信託		275	△12	-	-

2. 満期保有目的の金銭の信託〔前・当連結会計年度〕該当ありません。

3. その他の金銭の信託(運用目的及び満期保有目的以外)

(単位:百万円)

種 類	期 別	前連結会計年度末(平成15年3月31日現在)					当連結会計年度末(平成16年3月31日現在)				
		取得原価	連結貸借対照表計上額	評価差額	うち		取得原価	連結貸借対照表計上額	評価差額	うち	
					うち益	うち損				うち益	うち損
その他の金銭の信託		3,000	2,982	△17	-	17	3,000	2,981	△18	-	18

(注) 1. 連結貸借対照表計上額は、前連結会計年度末日、当連結会計年度末日における市場価格等に基づく時価により計上したものであります。

2. 「うち益」「うち損」はそれぞれ「評価差額」の内訳であります。

■その他有価証券評価差額金

連結貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

(単位:百万円)

種 類	期 別	前連結会計年度末(平成15年3月31日現在)	当連結会計年度末(平成16年3月31日現在)
評 価 差 額		△2,105	798
そ の 他 の 有 価 証 券		△2,087	820
そ の 他 の 金 銭 の 信 託		△17	△18
「そ の 他 の 資 産」中 の 出 資 金		△0	△3
(+)繰延税金資産(又は(△)繰延税金負債)		648	△322
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)		△1,456	476
(△)少数株主持分相当額		-	-
(+)持分法適用会社が所有するその他有価証券に係る評価差額金のうち親会社持分相当額		-	-
その他有価証券評価差額金		△1,456	476

■デリバティブ取引関係

1. 取引の状況に関する事項(前連結会計年度)

(1) 取引の内容

当行が取扱っているデリバティブ取引として以下のようなものがあります。

- ①先物取引……債券先物 ②オプション取引……債券店頭オプション
③スワップ取引…金利スワップ、通貨スワップ ④先渡取引…為替予約

(2) 取組方針

当行では、取引先の多様なニーズに応えるためにトレーディング(短期的に収益を追求する目的)やヘッジ目的でデリバティブ取引を行っております。債券先物取引によるトレーディング以外は、原則として投機的な取引を行わない方針であります。

(3) 利用目的

金利スワップ取引は主に当行の所有するローンの将来の金利リスクのヘッジ及び債券の安定した金利確保のためのヘッジ手段として利用しております。通貨スワップ取引は保有する外国通貨債券のヘッジ手段として、また為替先物取引を金利取引に置換えて把握するための資金関連スワップ取引として利用しております。

債券店頭オプション取引は、現物取引の補充手段として収益確保を目的として利用しております。

債券先物取引は、一定の範囲内で短期的な売買益の獲得を目指すために利用しております。

為替予約は、貿易為替取引等に起因する対顧客取引、及びそれをヘッジするインターバンク取引について利用しております。

(4) リスクの内容

デリバティブ取引に関するリスクは、市場の変化によって発生する市場リスクと取引相手の信用リスクがあります。

市場リスクとは、市場価格の変動によって将来の収益が変動するリスクであります。

信用リスクとは、契約額や想定元本とは異なり、取引の相手方が契約を履行できなくなった時点で当該取引を市場で複製する場合のコストであります。

(5) リスク管理体制

リスク管理については、売買権限基準に基づいてポジション枠の管理、損益管理を行い、またロスカットルールの設定によってリスクを一定の範囲内で管理できるように定めております。

デリバティブ取引の契約額や想定元本、評価損益等は毎月担当役員を通して取締役会で報告しております。

1. 取引の状況に関する事項(当連結会計年度)

(1) 取引の内容

当行が取扱っているデリバティブ取引として以下のようなものがあります。

- ①先物取引……債券先物 ②オプション取引……債券店頭オプション
③スワップ取引…金利スワップ、通貨スワップ ④先渡取引…為替予約

(2) 取組方針

当行では、取引先の多様なニーズに応えるためにトレーディング(短期的に収益を追求する目的)やヘッジ目的でデリバティブ取引を行っております。債券先物取引によるトレーディング以外は、原則として投機的な取引を行わない方針であります。

(3) 利用目的

金利スワップ取引は固定金利貸出のヘッジ手段として利用しております。通貨スワップ取引は保有する外国通貨債券のヘッジ手段として、また為替先物取引を金利取引に置換えて把握するための資金関連スワップ取引として利用しております。

債券店頭オプション取引は、現物取引の補充手段として収益確保を目的として利用しております。

債券先物取引は、一定の範囲内で短期的な売買益の獲得を目指すために利用しております。

為替予約は、貿易為替取引等に起因する対顧客取引、及びそれをヘッジするインターバンク取引について利用しております。

(4) リスクの内容

デリバティブ取引に関するリスクは、市場の変化によって発生する市場リスクと取引相手の信用リスクがあります。

市場リスクとは、市場価格の変動によって将来の収益が変動するリスクであります。

信用リスクとは、契約額や想定元本とは異なり、取引の相手方が契約を履行できなくなった時点で当該取引を市場で複製する場合のコストであります。

(5) リスク管理体制

リスク管理については、売買権限基準に基づいてポジション枠の管理、損益管理を行い、またロスカットルールの設定によってリスクを一定の範囲内で管理できるように定めております。

デリバティブ取引の契約額や想定元本、評価損益等は担当役員を通して取締役会で報告しております。

2. 取引の時価等に関する事項

(1) 金利関連取引

(単位:百万円)

区分	種類	前連結会計年度(平成15年3月31日現在)				当連結会計年度(平成16年3月31日現在)			
		契約額等	うち1年超	時価	評価損益	契約額等	うち1年超	時価	評価損益
取引所	金利先物								
	売建	-	-	-	-	-	-	-	-
	買建	-	-	-	-	-	-	-	-
	金利オプション								
店頭	売建	-	-	-	-	-	-	-	-
	買建	-	-	-	-	-	-	-	-
	金利先渡契約								
	売建	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	買建	-	-	-	-	-	-	-	-
	金利スワップ								
	受取固定・支払変動	3,000	3,000	△ 5	△ 5	3,000	3,000	△ 2	△ 2
	受取変動・支払固定	-	-	-	-	-	-	-	-
	受取変動・支払変動	-	-	-	-	-	-	-	-
	金利オプション								
	売建	-	-	-	-	-	-	-	-
	買建	-	-	-	-	-	-	-	-
	その他								
	売建	-	-	-	-	-	-	-	-
買建	-	-	-	-	-	-	-	-	
合計			△ 5	△ 5			△ 2	△ 2	

(注) 1. 前連結会計年度において時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。なお、ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引は、上記記載から除いております。前連結会計年度における当該金額は、契約額等1,814百万円、時価及び評価損益△10百万円であります。

2. 時価の算定は、オプション価格計算モデル等によっております。

(注) 1. 当連結会計年度において時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。なお、ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引は、上記記載から除いております。

2. 時価の算定
取引所取引につきましては、東京金融先物取引所等における最終の価格によっております。店頭取引につきましては、割引現在価値やオプション価格計算モデル等により算定しております。

連結情報

(2) 通貨関連取引

(単位:百万円)

区分	種類	前連結会計年度(平成15年3月31日現在)				当連結会計年度(平成16年3月31日現在)			
		契約額等	うち1年超	時価	評価損益	契約額等	うち1年超	時価	評価損益
取引所	通貨先物								
	売建	-	-	-	-	-	-	-	-
	買建	-	-	-	-	-	-	-	-
	通貨オプション								
店頭	売建	-	-	-	-	-	-	-	-
	買建	-	-	-	-	-	-	-	-
	通貨スワップ								
	為替予約								
	売建	-	-	-	-	6	-	6	0
	買建	-	-	-	-	-	-	-	-
	通貨オプション								
	売建	-	-	-	-	-	-	-	-
	買建	-	-	-	-	-	-	-	-
	その他								
売建	-	-	-	-	-	-	-	-	
買建	-	-	-	-	-	-	-	-	
合計							6	0	

(注) 1. 前連結会計年度において時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上すべきものはございません。なお、下記注2の取引は、上記記載から除いております。
 2. 「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号)に規定する経過措置に基づき、期間損益計算を行っている通貨スワップ取引については、上記記載から除いております。
 期間損益計算を行っている通貨スワップ取引の契約額等は、下記のとおりであります。

(注) 1. 当連結会計年度において時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。なお、ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引及び外貨建金銭債権債務等に付されたもので当該外貨建金銭債権債務等の連結貸借対照表表示に反映されているもの、又は当該外貨建金銭債権債務等が連結手続上消去されたものについては、上記記載から除いております。
 2. 時価の算定
 割引現在価値等により算定しております。
 3. 従来、引直し対象としていた先物為替予約、通貨オプション等は、当連結会計年度からは上記に含めて記載しております。なお、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号)に基づきヘッジ会計を適用している通貨スワップ取引等については、上記記載から除いております。

(単位:百万円)

種類	前連結会計年度(平成15年3月31日現在)		
	契約額等	時価	評価損益
通貨スワップ	10,871	△40	△40

また、同様に、先物為替予約、通貨オプション等のうち、前連結会計年度末日に引直しを行い、その損益を連結損益計算書に計上しているもの、及び外貨建金銭債権債務等に付されたもので当該外貨建金銭債権債務等の連結貸借対照表表示に反映されているもの又は当該外貨建金銭債権債務等が連結手続上消去されたものについては、上記記載から除いております。
 引直しを行っている通貨関連のデリバティブ取引の契約額等は、下記のとおりであります。

(単位:百万円)

区分	種類	前連結会計年度末 (平成15年3月31日現在)	
		契約額等	
取引所	通貨先物		
	売建	-	-
	買建	-	-
	通貨オプション		
店頭	売建	-	-
	買建	-	-
	通貨オプション		
	売建	-	-
	買建	-	-
	その他		
	売建	-	-
	買建	-	-

(3) 株式関連取引 [前:当連結会計年度] 該当ありません。

(4) 債券関連取引 [前:当連結会計年度] 該当ありません。

(5) 商品関連取引 [前:当連結会計年度] 該当ありません。

(6) クレジットデリバティブ取引 [前:当連結会計年度] 該当ありません。

連結情報

■連結リスク管理債権

(単位:百万円)

項目	平成15年3月期	平成16年3月期
破綻先債権額	5,671	4,239
延滞債権額	28,245	27,812
3カ月以上延滞債権額	255	358
貸出条件緩和債権額	5,997	3,886
合計	40,170	36,297

(注) 平成16年3月期連結リスク管理債権の項目説明につきましては、39ページの注記事項(※1から※4)に記載しております。

■連結自己資本比率(国内基準)

銀行法第14条の2の規定に基づき自己資本比率の基準を定める件(平成5年大蔵省告示第55号。以下、「告示」という)に定められた算式に基づき算出しております。なお、当行は国内基準を適用しております。(単位:百万円)

項目	平成15年3月期	平成16年3月期
資本金	7,485	7,485
うち非累積的永久優先株	-	-
新株式払込金	-	-
資本剰余金	5,875	5,875
利益剰余金	3,060	3,364
連結子会社の少数株主持分	6	7
うち海外特別目的会社の発行する優先出資証券	-	-
その他有価証券の評価差損(△)	△1,456	-
自己株式払込金	-	-
自己株式(△)	△13	△22
為替換算調整勘定	-	-
営業権相当額(△)	-	-
連結調整勘定相当額(△)	-	-
計(A)	14,956	16,709
うちステップ・アップ金利条項付の優先出資証券(注1)	-	-
土地の再評価額と再評価の直前の帳簿価額の差額の45%相当額	1,934	1,934
一般貸倒引当金	2,456	1,895
負債性資本調達手段等	5,540	5,680
うち永久劣後債務(注2)	-	-
うち期限付劣後債務および期限付優先株(注3)	5,540	5,680
計	9,931	9,510
うち自己資本への算入額(B)	9,600	9,510
控除項目	-	-
控除項目(注4)(C)	-	-
自己資本額(A)+(B)-(C)(D)	24,557	26,220
資産(オン・バランス)項目	331,543	339,428
オフ・バランス取引項目	8,567	7,930
計(E)	340,110	347,358
連結自己資本比率(国内基準)=D/E×100	7.22%	7.54%

(注) 1. 告示第23条第2項に掲げるもの、すなわち、ステップ・アップ金利等の特約を付すなど償還を行う蓋然性を有する株式等(海外特別目的会社の発行する優先出資証券を含む。)であります。

2. 告示第24条第1項第3号に掲げる負債性資本調達手段で次に掲げる性質のすべてを有するものであります。

(1) 無担保で、かつ、他の債務に劣後する払込済のものであること

(2) 一定の場合を除き、償還されないものであること

(3) 業務を継続しながら損失の補てんに充当されるものであること

(4) 利払い義務の延期が認められるものであること

3. 告示第24条第1項第4号及び第5号に掲げるものであります。ただし、期限付劣後債務は契約時における償還期間が5年を超えるものに限定されております。

4. 告示第25条第1項第1号に掲げる他の金融機関の資本調達手段の意図的な保有相当額、及び第2号に規定するものに対する投資に相当する額であります。

■セグメント情報

1. 事業の種類別セグメント情報

前連結会計年度(自平成14年4月1日 至平成15年3月31日)及び当連結会計年度(自平成15年4月1日 至平成16年3月31日)

連結会社は銀行業以外に一部でクレジットカード等の事業を営んでおりますが、それらの事業の全セグメントに占める割合が僅少であるため、事業の種類別セグメント情報は記載しておりません。

2. 所在地別セグメント情報

前連結会計年度(自平成14年4月1日 至平成15年3月31日)及び当連結会計年度(自平成15年4月1日 至平成16年3月31日)

本邦以外の国又は地域に所在する連結子会社及び在外支店がないため、該当事項はありません。

3. 国際業務経常収益

前連結会計年度(自平成14年4月1日 至平成15年3月31日)及び当連結会計年度(自平成15年4月1日 至平成16年3月31日)

国際業務経常収益が連結経常収益の10%未満のため、国際業務経常収益の記載を省略しております。